

日本遺産とは

1. 主旨と目的

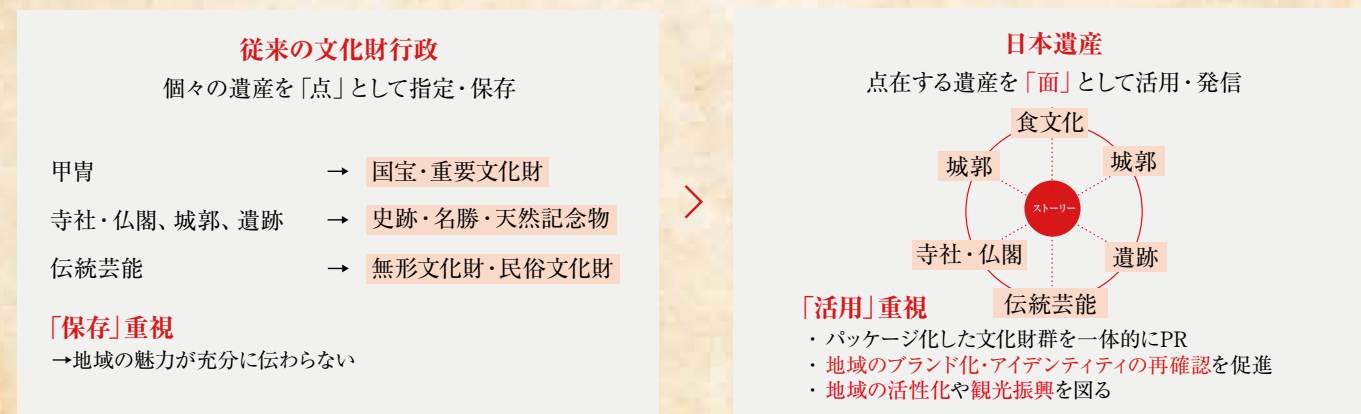
我が国の文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図るためには、その歴史的経緯や、地域の風土に根ざした世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたストーリーの下に有形・無形の文化財をパッケージ化し、これらの活用を図る中で、情報発信や人材育成・伝承、環境整備などの取組を効果的に進めていく必要があります。

文化庁では、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage）」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取組を支援します。

2. 日本遺産事業の方向性

日本遺産事業の方向性は次の3つに集約されます。

- ①地域に点在する文化財の把握とストーリーによるパッケージ化
- ②地域全体としての一体的な整備・活用
- ③国内外への積極的かつ戦略的・効果的な発信



3. 認定するストーリー

日本遺産として認定するストーリーは次の4点を踏まえた内容としています。

- ①歴史的経緯や地域の風習に根ざし、世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたものであること。
- ②ストーリーの中核には、地域の魅力として発信する明確なテーマを設定の上、建造物や遺跡・名勝地、祭りなど、地域に根ざして継承・保存がなされている文化財にまつわるものを据えること。
- ③単に地域の歴史や文化財の価値を解説するだけのものになっていないこと。
- ④その地域や文化財に関する専門的知識を持たない人も興味や関心を持てるものとする。

日本遺産のストーリーには次の2つの種類があります。

- 「地域型」…単一の市町村内でストーリーが完結
- 「シリアル型」…複数の市町村にまたがってストーリーが展開



日本遺産 フェスティバル IN 倉敷 ミニシンポジウム 2025

JAPAN HERITAGE
FESTIVAL
IN KURASHIKI

2025年10月26日(日) ▶ 10:00～14:55

会場：倉敷アイビースクエア（アイボリー）



日本遺産のストーリーを活かした地域づくりや魅力発信を、
ストーリーの垣根を越えてテーマごとにディスカッションを開催

第1シンポジウム 『酒～風土が醸す物語を活かす～』 26日(日) 10:00～11:00

第2シンポジウム 『古墳～遺跡が示す古代日本の姿を今に活かす～』 26日(日) 11:30～12:30

第3シンポジウム 『シリアル型日本遺産のあり方～広域連携が生む日本遺産の魅力～』 26日(日) 13:00～14:00

ミニシンポジウム 2025 の 開催にあたって



1. 日本遺産について

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産（Japan Heritage）」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力ある有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

2. 日本遺産ミニシンポジウムの趣旨・目的

日本遺産ミニシンポジウムは、日本遺産ストーリーの魅力発信や活用についての各地域の事例紹介及び意見交換を通じ、地域の魅力向上と地域間交流を図ることを目的としています。今回の日本遺産ミニシンポジウムでは、3つのテーマで地域の連携や新たな魅力を創出します。

ミニシンポジウム 2025

第1 シンポジウム『酒～風土が醸す物語を活かす～』 p3

コーディネーター（幹事）：八王子市産業振興部長 平塚 裕之 氏（日本産「桑部物語」推進協議会）

第2 シンポジウム『古墳～遺跡が示す古代日本の姿を今に活かす～』 p7

コーディネーター（幹事）：倉敷市日本遺産推進協議会 副会長 尾崎 聡 氏（倉敷市歴史文化基本構想等審議会 会長）

第3 シンポジウム『シリアル型日本遺産のあり方～広域連携が生む日本遺産の魅力～』 p11

コーディネーター（幹事）：小浜市御食国ブランド戦略課 主査 嶋田 幸起 氏（小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会）

ミニシンポジウム 2025 認定ストーリー所在地

第1 シンポジウム『酒～風土が醸す物語を活かす～』

083 琉球王国時代から連綿と続く沖縄の伝統的な「琉球料理」と「泡盛」、そして「芸能」

086 日本ワイン 140 年史～国産ブドウで醸造する和文化的結晶～

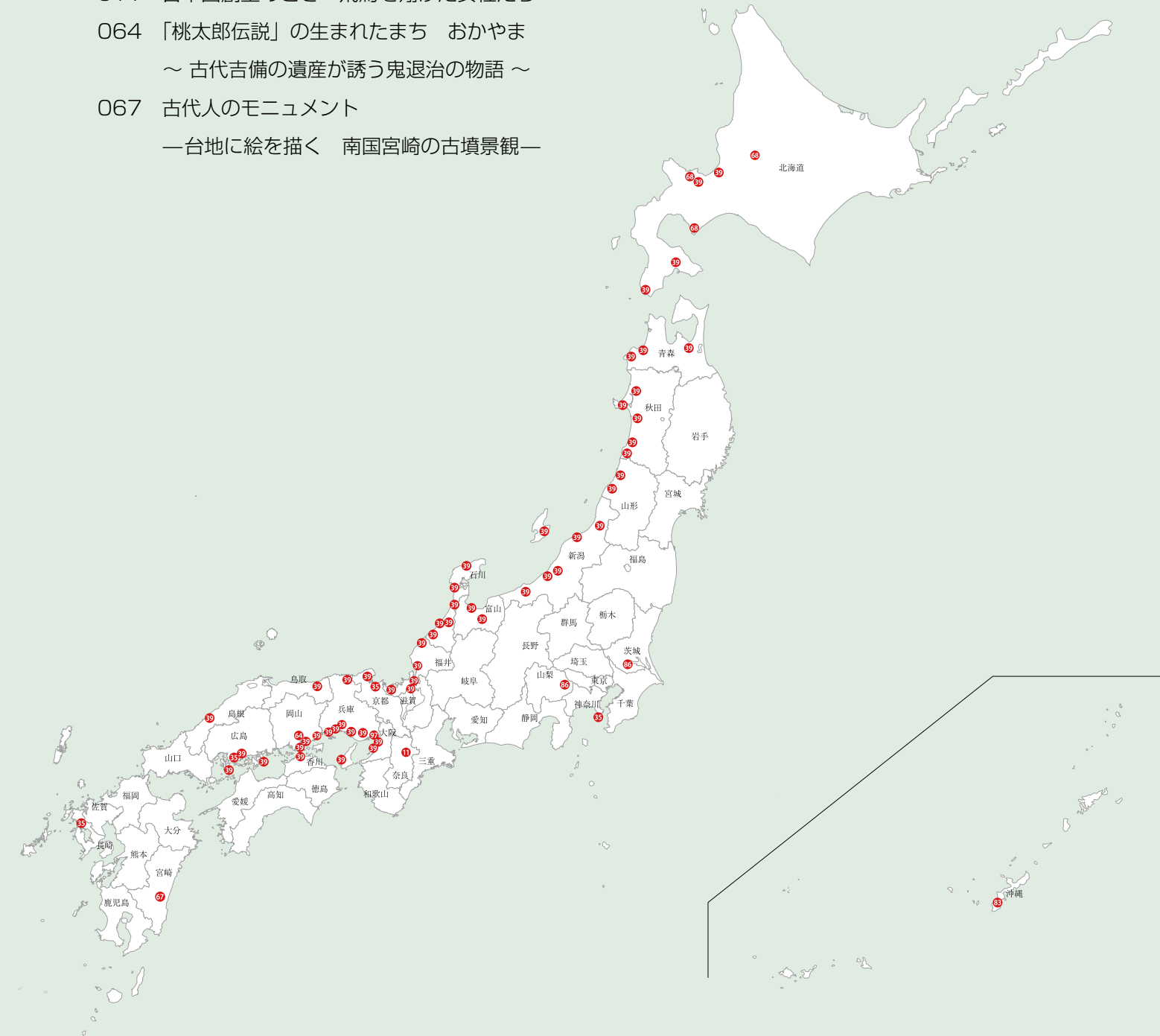
097 「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷

第2 シンポジウム『古墳～遺跡が示す古代日本の姿を今に活かす～』

011 日本国創生のとき～飛鳥を翔けた女性たち～

064 「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま
～ 古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語 ～

067 古代人のモニュメント
～ 台地に絵を描く 南国宮崎の古墳景観～



第3 シンポジウム『シリアル型日本遺産のあり方～広域連携が生む日本遺産の魅力～』

035 鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴 ～ 日本近代化の躍動を体感できるまち ～

039 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～ 北前船寄港地・船主集落 ～

068 本邦国策を北海道に観よ！～北の産業革命「炭鉄港」～

第1 シンポジウム『酒～風土が醸す物語を活かす～』

全国各地で古から地域の風土に育まれてきた「酒」（日本酒、焼酎、泡盛、ワイン等）。それは、そこに暮らしてきた人々の誇りでもあり、文化でもあり、各地域の日本遺産を語るうえで大きな魅力となっています。2024年には日本の「伝統的酒造り」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。また、国産ワインも、国際コンクールで数多くの受賞歴を誇り、国際的に評価を高めています。

本分科会では、「酒」にまつわる日本遺産ストーリーや構成文化財の活用と関連する地域との相互連携を通じて、国内外に向けた日本遺産ブランドのさらなる磨き上げへの道筋を探っていきます。



No.083 琉球王国時代から連綿と続く沖縄の伝統的な「琉球料理」と「泡盛」、そして「芸能」



No.086 日本ワイン 140 年史
～国産ブドウで醸造する和文化の結晶～



No.097 「伊丹諸白」と「灘の生一本」
下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷

登壇する日本遺産ストーリー

083 琉球王国時代から連綿と続く沖縄の伝統的な「琉球料理」と「泡盛」、そして「芸能」

琉球文化日本遺産推進協議会

086 日本ワイン 140 年史 ～国産ブドウで醸造する和文化の結晶～

ワイン文化日本遺産協議会

097 「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷

阪神間日本遺産推進協議会

琉球王国時代から連綿と続く沖縄の伝統的な「琉球料理」と「泡盛」、そして「芸能」

琉球文化日本遺産推進協議会 宮里 霞

1. 認定ストーリーの特徴

沖縄県民の生活に今なお根付いている、琉球料理や泡盛、伝統芸能は、琉球王国時代から育まれてきた文化です。

かつて琉球王国と呼ばれた沖縄は、諸外国との交易を通じて発展しました。そのため、外交は極めて重要で、「守礼の邦＝礼節を重んじる国」を掲げ、訪れる外国の賓客を丁重にもてなしました。その一環として発展したのが食文化や芸能であり、これらは国の存立にかかわるほどでした。琉球料理や御用酒泡盛、宴を盛り上げた芸能は、「世替わり」の歴史を映しながら、連綿と続く「守礼の心」で今も県民に受け継がれています。



守礼門（首里城公園）

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

日本遺産ストーリーの魅力を体感していただくため、構成文化財を巡りながら琉球料理や泡盛、芸能を楽しめるよう複数のテーマを設け周遊ルートを作成しました。

また、昨年度には、観光庁の実証事業の一環として、高付加価値旅行者を対象とした、日本遺産ストーリーを取り入れた、ガストロノミーツアー（モニターツアー）が実施されました。首里城のガイドツアーから始まり、歴史ある場所で琉球舞踊を鑑賞しながら泡盛を嗜み、現代版にアレンジした宮廷料理と泡盛などのペアリングを味わったり、歴史と文化を一連の流れで体験する内容となり、参加したゲストからは高い評価となりました。



琉球泡盛（酒器カラカラ）

3. 今後の展開

沖縄県では、「新・沖縄21 世紀ビジョン基本計画」と呼ばれる沖縄振興計画において、「沖縄らしい自然と歴史、伝統、文化を大切に作る島を目指して」「希望と活力にあふれる豊かな島を目指して」を掲げ、その具体的な取組みの1つとして、日本遺産を活用し、文化資源を活かした地域づくりと、沖縄のソフトパワーを活かしたツーリズムを推進することとしています。

日本遺産の活用に当たって、沖縄の文化が日本遺産に認定されているという事実が十分に浸透していないことが課題の1つとなっています。今後は、日本遺産の認知度向上のための整備の充実や、観光客目線に立ったサブストーリーの設定、民間事業者と連携した周遊ルートの作成などを実施し、日本遺産を通じて沖縄の文化の発信、普及に取り組んでいきたいです。



琉球料理（トウンダーブン）

日本ワイン140年史 ～国産ブドウで醸造する和文化の結晶～

ワイン文化日本遺産 協議会 木本 挙周

1. 認定ストーリーの特徴

今や世界中で愛され、わが国でもたくさんの銘柄が店頭に並び、気軽に楽しむことができるワイン。国産ブドウを原料とし、日本国内で醸造される日本ワインの140年にわたる歴史において、重要な地位を占めるのが山梨県甲州市と茨城県牛久市です。甲州市は地元のブドウ農家との共存繁栄をはかり、広大なブドウ畑と新旧30ものワイナリーを誕生させた一方、牛久市の牛久シャトーは、ブドウ栽培から醸造までの一貫した工程を構築し、たった1社で国内最大規模の醸造体制を確立しました。明治の文明開化期、国営では果たせなかったワイン醸造を、それぞれの地域の特性を生かし、民間の力で成し遂げたのです。切磋琢磨して日本のワイン文化の広まりに貢献した二つの街に息づく歴史を知れば、ワインの味わいもより深くなります。



日本遺産フェスタ

2. 認定ストーリーを活かした活用事例～民間事業者と連携した商品開発～

認定ストーリーを活用したイベントとして、牛久シャトー日本遺産フェスタを毎年開催しております。日本ワイン140年史の取り組みのほか、茨城県内の日本遺産認定自治体にも毎回参加いただき、各々の日本遺産ストーリーの周知を行なっております。また茨城県ノルディック・ウォーク連盟主催の構成文化財をガイドと巡るノルディック・ウォーク大会も毎回同時開催し、多くのお客様に現地を訪れて頂いております。牛久シャトー日本遺産フェスタはこれらの活動が評価され、スポーツ文化ツーリズムアワード2022「日本遺産ツーリズム賞」特別賞を受賞しました。

また、JR東日本土浦支社との共同企画で、2025年2月には水戸駅発牛久駅行のイベント列車「旅するときわ路ワイン号」を運行し、認定ストーリーの周知のほか、構成文化財である日本初の本格的ワイン醸造場「牛久シャトー」醸造のワインや明治期の甘味葡萄酒を列車内で満員のお客様に味わって頂きました。

さらに、構成文化財である牛久シャトーがアニメラブライブ！スーパースター!!の舞台になったことを契機にコラボイベントの開催及びコラボグッズの販売を行なうことで、歴史・文化・ワイン好きとは違った新たな顧客層の獲得にも力をいれております。



旅するときわ路ワイン号

3. 今後の展開

これまでの取り組みを継続的に進めるに加え、他の日本遺産認定ストーリーや自治体、民間事業者との連携強化を図り、日本遺産ストーリーを活かした付加価値・地域ブランドの向上を目指します。また、認定ストーリー並びに構成文化財の保存継承を図るためにも、次世代を担う小中学生への普及啓発活動を展開していきたいと考えております。

また、本年度より「日本遺産日本ワイン140年史サポーター制度」を導入し、認定ストーリーの普及啓発、構成文化財の保存継承に貢献して頂ける団体等を認定することで、持続可能な認定ストーリーとなるよう目指してまいります。



ラブライブ！

「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ 銘醸地、伊丹と灘五郷

阪神間日本遺産推進協議会 笹部 琢也

1. 認定ストーリーの特徴

清酒発祥の地とされる伊丹市にある「鴻池稻荷祠碑」には、「澄み酒」を製造し、江戸まで出荷したことが刻まれています。当時上方から江戸に運ばれる酒は「下り酒」として歓迎され、その中でも伊丹の清酒は「伊丹諸白」として珍重され、江戸で人気を博しました。時代の流れとともに、清酒造りは、伊丹から日本最大の酒造地帯である西宮・灘の地域「灘五郷」へと移っていきます。ここで製造される清酒は「灘の生一本」と呼ばれ、優れた技術、良質な米と水、酒輸送専用の樽廻船によって上質な酒を江戸に届け、清酒のスタンダードを築きました。酒造家たちの技術革新への情熱は、伝統ある酒蔵としての矜持と進取の気風を生み、今日「阪神間モダニズム」と呼ばれ阪神間の都市骨格を形作りました。六甲山の風土と人に恵まれたこの地では、水を守り米を育てる人々、祭りに集う人々、酒の香漂う酒造地帯を訪れ、蔵開きを楽しむ人々が共にあり、400年の伝統と革新の清酒が造られて、今もなお日本だけでなく、世界中で愛される多彩な清酒を作り続けています。



構成文化財（鴻池稻荷祠碑）

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

日本遺産認定後、地域住民の「誇り」や「愛着」を醸成するための普及啓発の取り組みやストーリーや構成文化財の情報発信のためのコンテンツの制作や整備を促進してきました。

普及啓発に関しては、市民向けの日本遺産講座の実施や、小学校の社会科の副読本に日本遺産ページの作成、小学校への日本遺産出前講座などを通じて、シビックプライドの醸成を図っています。

またガイド育成のため文化財ボランティア団体への講座やガイド用の教材・動画制作や動画サイトでの配信も行い、多くの方がストーリーを学べる機会を創出しています。その他、構成文化財やストーリーの解説がある日本遺産リーフレットの制作、「伊丹と灘五郷」エリアを周遊できるモデルコースを盛り込んだ観光目線のパンフレットも新たに制作しています。

更にデジタルコンテンツにも力を入れています。SNSを活用し、フォトコンテストの企画と併せて実施したデジタルスタンプラリーの開催や、多言語対応した協議会webサイトを制作し、9つのモデルコースや飲食から宿泊施設、観光ができる構成文化財など、実際に来訪者が楽しめるコンテンツを制作しました。近年はインフルエンサーを活用した発信にも力を入れており、幅広い層への情報発信を行うことで、認知度向上を図っています。これらの活動に加え、様々なイベントに日本遺産のブースを出展し、来場者の方々に幅広くPR活動を実施しています。



構成文化財（灘五郷・酒造り唄）



観光パンフレット

3. 今後の展開

昨年、ユネスコ無形文化遺産に登録された「伝統的造り」に加え、「地理的表示制度」に「GI伊丹」が指定されたことで、当該エリアには「GI伊丹」「GI灘五郷」が揃いました。これらを踏まえ、日本酒に国内外からの注目が高まっていることを契機と捉え、地元企業や鉄道会社などの日本遺産オフィシャルパートナー等と連携を図り、事業展開をすることに加え、情報発信も強化し、多くの来訪者に「伊丹と灘五郷」エリアの魅力を知っていただける事業を実施したいと考えます。併せて、当協議会はシリアル型で地域が広範囲に及ぶことから、来訪者に周遊を促す取り組みが今後も重要と考えており、これまで以上に地域間の連携強化を図り、持続可能な活動の展開が必要となります。また、兵庫県は日本遺産の認定が全国最多の9件あり、「兵庫五国日本遺産ネットワーク会議」などで県内の他の日本遺産認定地域との連携や情報共有など、横断的な取り組みを図っていきたく考えております。



日本酒マリアージュイベント

第2シンポジウム

『古墳～遺跡が示す古代日本の姿を今に活かす～』

全国100を越える日本遺産の中で、「古墳」にまつわるストーリーを持つものは数多くあり、今回の日本遺産フェスティバルの会場である岡山県倉敷市は中国王朝風の葬制と前方後円墳の出現を予感させる規模構造を持つ弥生時代最大の巨大墳丘墓「楯築（たてつき）」、分科会登壇の岡山県岡山市は並み居る天皇陵をはるかにしのぐ5世紀初頭では日本最大級の大きさを持つ「造山古墳」、奈良県高市郡明日香村は全国民を巻き込む考古学ブームを作った「高松塚古墳」石室の男女群像彩色壁画、宮崎県西都市は天孫降臨と神武東征の神話の謎を秘めた九州最大規模の「西都原古墳群（九州最大規模の前方後円墳“女狭穂塚（めさほづか）”“男狭穂塚（おさほづか）”を含む）」を擁しています。分科会では、本来が魅力いっぱいの古墳のストーリーをさらに大飛躍させる可能性がある地域間連携事業の構想と課題を語り合います。



No.11 日本遺産「飛鳥」魅力発信事業推進協議会



No.064「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま
～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～



No.67 古代人のモニュメント
～台地に絵を描く 南国宮崎の古墳景観～

登壇する日本遺産ストーリー

011 日本国創生のとき～飛鳥を翔けた女性たち～

日本遺産「飛鳥」魅力発信事業推進協議会

064 「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま ～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～

日本遺産「桃太郎伝説の生まれたまち おかやま」推進協議会

067 古代人のモニュメント ―台地に絵を描く 南国宮崎の古墳景観―

日本遺産南国宮崎の古墳景観活用協議会

日本国創成のとき

～飛鳥を翔けた女性たち～

日本遺産「飛鳥」魅力発信事業推進協議会

1. 認定ストーリーの特徴

日本が「国家」として歩み始めた飛鳥時代。この日本の黎明期を牽引したのは女性でした。この時代の天皇の半数は女帝であり、彼女たちの手によって、新たな都の造営、外交、大宝律令を始めとする法制度が整備されました。

また、文化面では、女流歌人が感性豊かな万葉歌を高らかに詠い上げ、宗教面では、尼僧が仏教の教えを広め、発展させるなど、政治・文化・宗教の各方面で女性が我が国の新しいかたちを生み出し、熟成させていきました。

日本国創成の地である飛鳥は、日本史上、女性が最も力強く活躍した場所であり、その痕跡が色濃く残る地です。



2. 認定ストーリーを活かした活用事例

【語り部によるストーリーの伝達】

人物にスポットをあてた日本遺産「飛鳥」では、ストーリーをいかに伝達し、構成文化財と結びつけるかが重要です。そのため、来訪者に日本遺産「飛鳥」のストーリーを伝える現地ガイドの「語り部」を養成し、体験型プログラム・ツアーを造成しています。



3. 今後の展開

当協議会は橿原市、高取町、明日香村の3市町村で構成されるシリアル型の協議会です。日本遺産を題材とした商品化を行い、観光・経済活性化の好循環を確保し、持続可能な地域を目指していきます。そして、来訪者へのおもてなしの心を持ち、観光事業等へのサポートにより地域産業を活性化させて、関係人口や移住者の増加を目指していきます。

日本遺産「飛鳥」公式サイト <https://asuka-japan-heritage.jp/>



「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま ～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～

日本遺産「桃太郎伝説の生まれたまち おかやま」推進協議会 草原孝典

1. 認定ストーリーの特徴

いにしえに「吉備(きび)」と呼ばれた岡山では、古くから鬼退治の伝説が語り継がれてきました。この伝説は、大和王権から遣わされた吉備津彦命(きびつひこのみこと)が「温羅(うら)」の名で登場する鬼を退治することから、「温羅伝説」とも呼ばれています。

この鬼退治の伝説には、古代吉備が大和と同等の勢力を持っていた時代があったとされる歴史的背景があります。2世紀に築かれた弥生時代最大級の王墓「楯築遺跡」(倉敷市)、3世紀後半で大和王権以外では最も大きい「浦間茶白山古墳」(岡山市)、さらに5世紀初頭に築かれ、同時期の大王墓(上石津ミサンザイ古墳)とほぼ同規模の「造山古墳」(岡山市)、造山古墳より縮小こそしたものの大王墓に次ぐ規模を保つ「作山古墳」(総社市)、「両宮山古墳」(赤磐市)。古代吉備の果たしてきた役割が、大和王権の象徴である吉備津彦命と対等に渡り合った「温羅伝説」に投影されたものともいわれています。

また、吉備の地は、晴天の多い温暖な気候に恵まれ、古くから桃栽培が盛んでした。この岡山ならではの気候や風土、歴史と温羅伝説とが深く結びつき、昔話「桃太郎」の原型が形づくられたとされています。

温羅の居城とされる「鬼ノ城(きのじょう)」をはじめ、吉備津彦命が祀られた「吉備津神社」と「吉備津彦神社」、温羅のうなり声ともいわれる釜の鳴る音で吉凶を占う「鳴釜神事」、そして巨大な古墳の数々。岡山には伝説ゆかりの歴史・文化遺産が数多く現存しており、現地を訪ねると歴史と伝承が融合した壮大なストーリーを肌で感じることができます。

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

平成30年度の認定以降、4市からなる本協議会構成員が主体となり、桃太郎伝説等をキーワードにした体験プログラムの創出やモデルコースの作成、ツアー造成、吉備路エリアの日本遺産スポットを巡るオリジナルレンタサイクル「きびチャリ」の導入、Webアプリを活用したクイズラリーの実施、JR桃太郎線でのラッピング列車の運行など、様々な事業に取り組んできました。特に体験プログラムは、地域の魅力再発見や人材育成の観点を重視し、地域住民や地域の事業者が主体となって実施する体制が整ったことで多彩なプログラムが開発され、令和7年度は新たな試みとして各体験コンテンツを一堂に集めた「日本遺産体験フェスティバル」を開催することにしています。

また、ストーリーを特徴づける古墳を活用した取組も多く、構成文化財の古墳をモチーフにした御墳印スタンプ企画「古墳に行くんじゃ」をはじめ、地元企業と連携した古墳パン巡りスタンプラリー、古墳シンガーであり、古墳にコーファン協会会長のまりこふん氏をナビゲーターに古墳を巡る日帰りバスツアーの実施、令和6年度は造山古墳を糸口に古代吉備の歴史について学ぶシンポジウムを開催しました。

3. 今後の展開

現在、吉備エリアに集中する巨大墳墓で発掘調査が活発化しています。岡山市では令和7年度に制作する造山古墳と6基の陪塚のVR動画を、令和8年度から発信します。築造当初の姿や築造過程を臨場感のある映像で示す内容となっており、超巨大古墳に登り、その迫力を体感するには、吉備を訪れるしかないことをアピールしていきたいと考えます。

吉備の開化期を告げる楯築遺跡、発展期に相当する造山古墳、初の本格的調査が始まった作山古墳。どのようにして巨大な墳丘が築かれたのか、どのような埴輪が使用されたのかなど、新たな魅力の発見が期待されます。今後も文化財と観光の融合、いわば学術的根拠に裏付けされた観光誘客を基本方針とした観光戦略を展開していきます。



日本遺産シンポジウム
「葬られた古代吉備の歴史」の様子



令和2年にオープンした
「岡山市造山古墳ビジターセンター」



構成文化財：楯築遺跡

古代人のモニュメント

— 台地に絵を描く 南国宮崎の古墳景観 —

日本遺産南国宮崎の古墳景観活用協議会 中村廣文

1. 認定ストーリーの特徴

日本独自の形である前方後円墳という古墳が造られた時代。宮崎平野でも西都原古墳群を始め多くの古墳が造られました。列島各地であまた造られた古墳のある景観(風景)は時の移ろいの中で様変わりますが、宮崎平野には繁栄した当時に近い景観が今も保たれています。

古墳の姿形が損なわれることなく、古墳の周りに建築物がほとんどない景観は全国で唯一です。また、生目古墳群から西都原古墳群・持田古墳群・新田原古墳群、さらに蓮ヶ池横穴群へと、繁栄を極めた順に巡ると、南九州の豪族達の栄枯盛衰を感じることや、副葬品や埴輪といった古墳からの出土品を鑑賞することで古墳時代の生活を実感することができます。このような古墳をテーマにしたフィールドミュージアムとしての楽しみ方ができるのは、宮崎平野の古墳群だけです。



古墳のフィールドミュージアム



西都原鬼の窟古墳

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

多くの古墳があることで、女狭穂塚古墳に埋葬されているとされる木花咲耶姫(このはなさくやひめ)の話を始め、古墳に関わる数々の神話や伝説、祭事などが生まれました。

西都原古墳群をメイン会場として開催される「西都古墳まつり」は、毎年11月の第一土曜日と翌日の日曜日の2日間にわたって開催され、古代衣装を着た約600名の人々が松明を持ち、都萬神社から西都原御陵墓までの約4kmの日向神話の伝承地を辿っていく「松明行列」や、ニニギノミコとコノハナサクヤヒメに纏わる物語を幻想的な踊りや音楽で再現する「炎の祭典」などが行われます。

協議会では、「古代人のモニュメント」の認定ストーリーを魅力的かつ分かりやすく伝えるために、ヤマト王権と日向国との関りを伝える「ミュージカル」や「絵本」を作成して小中学生の郷土学習などに活用、また実際に上空から古墳群を見下ろす熱気球体験などを実施するなど日本遺産の認知度の向上、魅力発信を行っているところです。



西都古墳まつり「炎の祭典」

3. 今後の展開

これまで、様々な形で宮崎の古墳群の魅力を伝えるための取り組みを行ってきましたが、多くの旅行者に古墳群を巡っていただくには、宮崎空港や宮崎駅、宮崎港という主要な公共交通の拠点から各古墳群までの公共交通手段が脆弱で、短期型の旅行に向かないという現実的な課題を抱えています。

今後の展開としては、これまで日本遺産認定による観光客の引き込みを公共交通機関に依存してきましたが、天候の変化や時間にとらわれずに柔軟な行程の調整が可能で運搬能力を備えた自家用車やレンタカーで移動する旅行者を対象とした誘客を積極的に進めていく必要があります。

不便に感じる古墳群の観光イメージを快適なイメージに変えていくために、他のレジャー、食、景勝地等といった魅力のある観光コンテンツと組み合わせることで誘客のインセンティブに繋がるような周遊モデルコースを設定すること、また、旅行者自ら旅行行程を作成できるAIモデルコース検索システムを導入することにより、土地勘の無い旅行者に「タビマエ」の準備の段階で地域の魅力を伝えていきたいと考えています。



地域資源を活かした日本遺産旅行商品造成実行会議

第3 シンポジウム シリアル型日本遺産のあり方 ～広域連携が生む日本遺産の魅力～

複数の市町村にまたがってストーリーが展開される「シリアル型」日本遺産は、共通のテーマを活かして広域的に事業展開が可能なスケールメリットを有している一方で関係自治体間の合意形成や一体感の醸成などに難しさを抱えています。

本第3分科会では、シリアル型の認定地域における人材交流・広域観光・組織整備等の分野での取り組みや課題の報告を踏まえ、ストーリーを活かした今後の地域連携の可能性について語り合います。



No.035 鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴
～日本近代化の躍動を体感できるまち～



No.039 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間
～北前船寄港地・船主集落～

「帆走する北前船」(井田家旧蔵古写真・福井県立若狭歴史博物館) 出典:『デジタルアーカイブ福井』



No.068 本邦国策を北海道に観よ!
～北の産業革命「炭鉄港」～

登壇する日本遺産ストーリー

035 鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴 ～日本近代化の躍動を体感できるまち～

旧軍港市日本遺産活用推進協議会

039 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～

北前船日本遺産推進協議会

068 本邦国策を北海道に観よ!～北の産業革命「炭鉄港」～

炭鉄港推進協議会

鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴 ～日本近代化の躍動を体感できるまち～

旧軍港市日本遺産活用推進協議会 神村和輝

1. 認定ストーリーの特徴

明治時代、日本は「富国強兵」のスローガンのもと、国を挙げて近代化に邁進しました。その国家プロジェクトの一環として近代的な海軍が創設され、横須賀・呉・佐世保・舞鶴、4つの港に「鎮守府」が設置されました。

鎮守府とは、軍港を中心とした周辺海域の防衛に加え、兵士の徴募や訓練、海軍工廠(艦艇の建造・修理等をおこなう工場)や病院、水道など多岐にわたる施設の管理・統括をおこなった海軍の重要機関です。

鎮守府には常に最先端の工業技術や設備が投入され、艦艇が行き交う港をはじめ、製鉄や造船を担う工場、赤れんがの倉庫群等が次々と建設されました。また、水道や鉄道などの都市基盤も整備され、四市は急速な発展を遂げました。そして海軍は技術者の養成にも力を注ぎ、そこで培われた高度な技術が民間企業へと移るなかでさらに発展し、造船技術を中心に日本の近代化を根底から支える大きな力となりました。さらに、今ではおなじみのカレーや肉じゃがといった食文化、スポーツや音楽といった娯楽や文化も、この海軍のまちから全国へと広がっていきました。

激動の時代を経て、四市は旧軍財産を活かした平和産業港湾都市へと生まれ変わりました。しかし、鉄道や水道、通信施設など、鎮守府建設のために造られた軍港関連の近代化遺産のなかには、今なお現役で稼働する施設も多く、当時の技術水準の高さを今に伝えています。鎮守府が置かれ、日本の近代化を支えた特別な歴史を共有し、その歴史を体感できるのは日本でこの四市だけです。近代化に向けて躍動した往時の姿を色濃く残す旧軍港四市は、懐かしさと逞しさが共存する独特な魅力で訪れる人々を惹きつけてやみません。



構成文化財「舞鶴赤れんがパーク」

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

当協議会では、行政だけでなく、観光協会や民間事業者、教育機関等の多様な主体が連携し、日本遺産を活かしたまちづくりに取り組んでいます。例えば、四市のガイドが交流し、お互いのまちの共通点や違いに気づくことで、それぞれの個性を際立たせる「ガイド交流会」をはじめ、市内周遊と四市の広域周遊に結びつけることを目的とした「護守印帳」の販売、「理系で読み解く日本遺産」をキーワードに行政・研究機関・所有者等の連携体制を構築し、構成文化財や未認定の遺産の学術的な調査研究を進めるとともに、明らかとなった価値の発信を図る「学術調査研究会」事業。その他、各市で軍港めぐり遊覧船を運航する民間事業者同士による広域連携「クルーズサミット」や、それぞれのまちの海軍グルメを発信するイベント「グルメ交流会」等、「海軍ゆかりの食文化」を活かした観光誘客や新たな商品開発に努めています。



ガイド交流会

3. 今後の展開

これまでから多様な主体との連携を目標に掲げ、クルーズサミットのような民間事業者間の連携が始まったところですが、今後さらなる展開のためにも、市をまたいだ民間事業者の連携を促し、ノウハウの共有や事業の横展開による新たな広域連携の実現を目指します。

また、「鎮守府のストーリー」を体験できる観光商品・サービスの開発と提供についても民間主導への転換を進め、魅力的でかつ持続可能な観光コンテンツ造成に取り組み、遠く離れた四市によるシリアル型であることのメリットを活かした広域連携観光コンテンツを生み出し、鎮守府のストーリーでしか体験できない特別な価値を創造し、四市周遊の実現を図りたい。一方で、各市の市民に対しても、日本の近代化に大きく貢献した鎮守府のストーリーの発信を続け、シビックプライドを醸成するとともに、市民一人ひとりが構成文化財等の保存と継承について理解を深めることで、保存と活用の好循環につなげていきたいと考えます。



鎮守府「護守印帳」

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～

北前船日本遺産推進協議会 中野秀治

1. 認定ストーリーの特徴

1672年、酒田の港から藩米を江戸へ日本海経由で輸送する航路を開拓したのは江戸幕府の命を受けた川村瑞賢。北前船が出現する以前、近江商人は蝦夷との交易を活発化させ、商品は北陸へ陸揚げ後日本最大市場である大阪京都へ運んでいました。川村瑞賢が開拓した日本海・瀬戸内を通る航路と、近江商人が蝦夷と交易していた航路が繋がり誕生したのが北前船「西回り航路」です。当時の地域間価格差を利用、寄港地で安い物があれば買い、高く売れる港では高く売る、買って売ってを繰り返す「のこぎり商い」で稼ぐ豪商が誕生し「動く総合商社」が活躍します。船乗り達は日本海の荒海を避け港に寄港すると出航までの間に料亭や茶屋などで各地の民謡や芸能などを伝えました。「おけさ」や「あいや節」となり今でも歌い継がれています。蝦夷では春になるとニシンが大量に押し寄せニシン粕として瀬戸内の綿花の肥料として高く売られ、当地では繊維産業が盛んになります。このように寄港地では各地の商品が集積し問屋ができ市が立ち、産業が興り町が形成されていったのです。日本海は天候が悪いと激しく海が荒れ、難破や遭難することもある命がけの商売なので「板子一枚下は地獄」と言われていました。船乗り達は信仰が厚く無事帰還すると神社や寺院に船絵馬や玉垣、灯籠などを奉納します。氏名や日付を入れているので時代がわかり当時の状況が偲ばれます。北前船の寄港地・船主集落は、町の作り、祭り、芸能、神社仏閣の雰囲気など他の町とは異なる趣を感じる町です。



大阪市「住吉大社」全国に2300社ある住吉神社の総本社



酒田市 相馬屋主屋 北前船の商人たちが利用した料亭



新潟市 古町芸妓



宮津市キッズ学芸員の取組み

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

2017年度の認定以降、試行錯誤しながら活性化の事業を推進してきました。2025年度現在、16道府県52市町のシリアル型最大の広域日本遺産ですが、全体の活動と個別の取組みに加え、地域の特徴を活かせるよう5つの地域に分けたブロック単位での活動など、多角的な活動により推進しています。具体例として、①ガイド人材育成による観光客誘致や地元こども達を含むシビックプライドの醸成、「こども・一般参加オンラインセミナー」の実施 ②人材不足や高齢化対策として博物館等でのDX化・多言語対応を進め、外国人を含む来訪者の満足度向上とリピーター確保 ③「日本遺産サポーター大学」との連携 若者の目を活用し地域資源の発掘や体験学習による地元への提案(首都圏から発信/青山学院大学総合研究所)④自立自走を目指した民間企業との連携強化によるオリジナル菓子の開発・販売やECサイトの開設、さらに東京・有楽町でのアンテナショップ展開などを継続していきます。

3. 今後の展開

北前船寄港地には独特の町並みや特徴的な町割りは今も残されています。現在、ストーリーを体感できるようガイダンス施設や案内板の整備を推進していますが、各自治体の取組みには温度差もあるのが現状です。そのためブロック内先進地域の事例を共有し魅力向上を図っていきます。また古民家カフェや飲食店の誘致など町並み整備を進め、外国人を含む観光客の更なる誘致と観光消費拡大を目指します。食文化や伝統芸能の掘り起こしと継承も重要な柱です。一方「北前船ストーリー」を訴求する学習効果の高い魅力ある動画コンテンツを制作し次世代ターゲット層の若者にSNSなどを通じた発信を強化します。交通系企業や旅行社などで組織する姉妹団体「北前船交流拡大機構」とは「北前船寄港地フォーラム」で継続的に連携しメンバー間の活発な交流や関係人口の増加を推進します。

本邦国策を北海道に観よ! ～北の産業革命「炭鉄港」～

炭鉄港推進協議会 平野義文

1. 認定ストーリーの特徴

～明治初期、わずか5万人だった北海道の人口は、100年間で100倍に膨らむ急成長を遂げました～

その原動力こそ本邦国策を北海道に観よ!北の産業革命「炭鉄港」であり、薩摩による北方戦略、開拓使の殖産興業、戦時体制、経済復興、高度経済成長に伴う石炭産業の興隆です。しかし国策に翻弄され、現在は“衰退先進地”と揶揄される地域へ。その舞台となるのが、膨大な石狩炭田(いしかりたんでん)を有し、かつて数多くの炭鉱が存在した空知(そらち)地域の「石炭」、それを積み出した小樽や室蘭の「港」、石炭産業に起源を持つ室蘭の「製鉄・製鋼」、そして各地を結んだ「鉄道」が紡ぐストーリーです。

現在は役目を終えたものがほとんどですが、炭鉱のシンボリック存在の立坑櫓や国指定重要文化財の旧手宮(てみや)鉄道施設など、その記憶の手がかりとなる現在物が15市町100km圏内に数多く存在しています。しかし「炭鉄港」の価値はモノだけではなく、石炭産業を中心に明治から現在までに生じた大規模な“栄枯盛衰の軌跡”そのものが魅力であり、そこに携わった人々やモノ、地域が現存することで、多くの人々の情動を刺激するドラマティックなストーリーを体感することができるのです。



最盛期の北炭夕張炭鉱周辺



奔別炭鉱跡ガイドツアー

2. 認定ストーリーを活かした活用事例

石炭産業の終焉により「負の記憶」と称される衰退の著しい当該地域において、今後日本が歩む道を取り組む地域として、「すでに起きた未来」を価値に転換する取り組みを行っています。例えば炭鉱遺構等を活用したまち歩きや、スタジオジブリの世界観の如く、「産業的自然(Industrial nature)」を満喫できるアドベンチャートラベルを始め、それぞれの地域で行政やNPO、民間団体等で産業遺構や歴史を踏まえたガイドツアー等の取り組みが活発化しています。また、アートプロジェクトや、各地に残る食の文化を生かした「炭鉄港めし」の展開、各地の点を面の魅力に転化すべく「炭鉄港カード」等の配布事業などが効果を発揮し、認知度の向上と新たなファン層の獲得に繋がっています。更に今年からは、10月の三連休に構成市町全域で一斉事業展開を行う「炭鉄港3-DAYS Weekender ～観る! 聞く! 体験する! 食べる! 炭鉄港三昧の3日間～」を初開催し勢いを増しています。



炭鉄港めし「がんがん鍋」

3. 今後の展開

現在の各地で行われている取り組みを更に深めていくことはもちろんのこと、これまでにセブン-イレブン・ジャパンが炭鉄港めしの全道展開やANA、JR北海道等のキャンペーン企画、無印良品の新店舗装飾に炭鉄港要素を採用するなど大企業との連携もあり、今後もより一層模索していくとともに、炭鉄港は地域の歴史とも直結するため、学校教育や生涯学習とも親和性が高く、より多くの人々の学びの機会としての拡がりを目指します。また、炭鉄港の重要なテーマとして、各地における「シビックプライド醸成」の取り組みと、「ヒト・モノ・カネの巡る地域」の実現に向け、より大きな一歩を踏み出していきます。



炭鉄港 3DAYS Weekender ポスター